

2025年 3月 3日

留学報告書

南山大学長

ロバート・キサラ 殿

所 属 外国語学部英米学科

職氏名 講師 今井達也

留学先：Department of Communication Studies, University of Texas at Austin（アメリカ合衆国テキサス州）

期 間：2023年9月1日～2025年2月28日

目 的：「日米における異文化摩擦緩和のための対人コミュニケーション理論の援用を検討する研究」にともなう現地調査および研究交流のため

(1)当初の研究計画

当初計画していた研究対象は以下の3点（ABC）にまとめられる。

- A. 感謝表現の効果の異文化差
- B. 異文化適応における対人コミュニケーション理論の援用可能性
- C. 異文化適応と精神的健康の関わり

(2)研究業績

テキサス大学の施設や資料を活用し、以下の業績につなげることができた。

A. 感謝表現の効果の異文化差

下記の通り、感謝表現の効果について論文を出版することができた。研究結果をまとめると、自分が人に何かをしてもらった場合、日本では感謝だけでなく、謝罪をすることもあるが（『ありがとうございます。すみませんでした。』）、メッセージの受け取り手としては、シンプルに感謝を受け取ることが好ましいことが明らかになった。その感謝表現に、謝罪表現を重ねても、効果が高まることは確認されなかった。下記ジャーナルはすべて査読付きの国際ジャーナルで、インパクトファクターが付いているものとなる。

Imai, T. (2024). Saying “thanks” and “sorry” in a Japanese workplace: Expressing gratitude and apologies functions as an effective politeness strategy. *Communication Research Reports*.

Imai, T. (2024). Impacts of expressed gratitude and apologies on Japanese university students' and workers' perceived closeness: Mediating roles of responsiveness and predicted outcome values. *Communication Studies*.

Imai, T., & Sakura, M. (2024). Roles of expressed gratitude and apologies in predicting reciprocal responsiveness. *The Journal of General Psychology*

B. 異文化適応における対人コミュニケーション理論の援用可能性

名古屋大学のコミュニケーション研究者である谷口紀仁講師と共同プロジェクトを立ち上げ、アメリカにいる留学生が経験する差別の研究をまとめるレビュー論文を執筆した。論文は『A Review of the Discrimination Experiences of International Students in the U.S.: Synthesizing Findings of Quantitative and Qualitative Research』という名前で執筆され、現在、投稿ジャーナルの選定中である。

C. 異文化適応と精神的健康の関わり

ハワイ大学の Emiko Taniguchi-Dorios 准教授からの誘いを受け、精神疾患患者の自己開示に関する調査を共同で行っている。この研究は NCA research cultivation grant を受けることが決定し、これから日本でデータコレクションが行われる。

上記に加え「アメリカのコミュニケーション学がわかる：過去・現在・未来（仮）」という本の編集を行っている。編者は報告者に加え、Kikuko T Omori 准教授(California State University, Sacramento)、松本健太郎教授（獨協大学）となっている。初稿は著者からほぼ全て集められ、これから編集を行い、ナカニシヤ出版から 2025 年の出版を目指している。

上記にあるように、まだ進行中のプロジェクトもあり、留学終了後も業績につなげるべく、努力していきたい。最後に、このような留学の機会を与えてくださった外国語学部、英米学科をはじめ、南山大学の関係者の皆様に感謝の意を記したい。

以上